

第二回 社会福祉法人北心会発達講座 無事終了！

去る、1月14日に十和田市民文化センター生涯学習ホールにて第二回発達講座を行いました。

講師には日本福祉大学福祉経営学部学部長・教授であり、社会福祉法人陸月会理事長でもある綿祐二氏をお招きして「地域における発達支援とは？」というテーマで貴重なお話をさせていただきました。

北心会の職員の感想を以下に掲載します。(一部抜粋)

■20代で億の借金をして施設を立ち上げ…とお話しされていましたが、きっとご両親やご兄弟を見てもらおうと色々な施設を見学に行かれたことでしょうか。でも安心して任せられるところがなかったのか。それなら自分で納得のいくものを作ろう。とはなかなかならず、限られた選択の中、目をつぶりながら仕方ないと言い聞かせて預けていた私には驚くばかりで発想も及ばない。話の中でも置かれた境遇を仕方ない、現実だからと淡々とお話去れるほど、どれだけの思いをしてきたのか、私には計り知れない思いをしてきたのだらうと思うと胸がいっぱいになり涙があふれてきました。すべて福祉に任せ自分は離れることもできただらうに、あえてその福祉に飛び込んで…だから今回お会いすることができ、力と希望を与えていただくこととなり感謝しています。それから共依存のことで、子どもはどんなに障害があってもその年齢分の非認知能力を持っているので適応していけるのに親が子離れできずにいるのは自分以外でも安心して任せられる人、場所である終の棲家にまだ不安があるからかもしれない。親がいつまでも見てあげることとはできず、親亡き後も介助してもらいながらその子らしく安全で楽しく生活していけるように導いていくためにも親が子どもを年相応に尊重することは非常に大切なことだと改めて思いました。地域で共存していくにはやはり、コミュニケーションが重要で誰を味方につけるか、ということも大事なことでやはり難しい問題だろう。しかし、いろんなことに希望が持てた講演でした。

■最後に綿先生が言っていた「障害者の親の気持ちはわからないけれど、兄弟の気持ちはわかる。わからないからこそ、わかることがある」というのが特に印象に残りました。その人の気持ちをわかろうとすることも大事だけど、自分の立場だからこそ分かる事というのも大事にしていきたいと感じました。

■初めは、福祉や障害者の内容の話となると、厳しい現実や、真面目な感じになるのかなと思っていましたが、綿先生のお話の内容は、そのイメージをガラッと覆すもので、「な

るほど！そういう手もあるのか！」と気づかせられるところがいっぱいありました。中でもJリーグのユニホームのお話は、一見ユーモアあふれるものでありましたが、社会の仕組みをうまく利用していくかに、この福祉の仕事が成功するかが隠されているのかな…と思いました。綿先生が行っている事業所の置かれている環境と、こちらの環境はまた全く違うものであるので、そううまくはいかないだろうな…と思うのも正直な思いますが、その前向きで、何事もプラスに考え、上手く利用していこう。利用者と一緒に楽しんじゃおうという考えがとても共感できました。地域と共に生きる社会の難しさはまだまだ山積みであるし、そう簡単につながることも容易ではないと感じるのが現実ですが、少しでも今回の講演をヒントに、楽しく利用者と過ごしていくことができるように、私たちも頑張っていきたいと思いました。

■綿先生の話聞いて思ったことは、「こうでなければならない」ということはないのではないかと思います。就労の利用者さんの仕事内容が「コレ」と決めることなく、色々なことにチャレンジ、仕事の種類の幅を広げる事で環境や自分のモチベーションも上がるのだと思います。そのことは周りの人、家族、職員が関わることだと思います。周りの職員が楽しんで仕事をするには子どもたちにとって何が楽しいか、利用者さんたちが楽しく仕事ができるには、と自分も楽しむことを考えながらいくといいのではないかと思います。地域との繋がりも理解も難しく、地域で生きる権利、地域で生きる義務もあるが、権利や義務ばかり主張してもいけない。地域の人にわかってもらうには生半可なことではいけないと思います。わかってもらうには、そこで働く職員が理解して地域の交流も大切にしないといけないということです。その地域で働くには、働くことだけでなく、地域との繋がり、関わりも大事だと思います。

■今回の綿先生の講演会で感じたことは、障害者であろうと健常者であろうと、人間としてまっとうに生きていくことが一番大切なのだということを改めて実感しました。「障害者だから」と構えるのではなく、できないことは手伝ってあげればいいし、できることを見つけたり、増やしていくことの方がよっぽど大事です。先生の事業所では、重度の方たちも自分の仕事を持ち、工賃をもらっているという話を聞き、色々なアンテナ（地域資源を活用するだけでなく、作り出していく力）を持っていれば、本当の意味での支援はできないと感じました。そして綿先生もおっしゃっていましたが、教育の質は教師や学校によって差が大きく、うちの利用児でも、「これやれたら、おやつあげるよ」という考えられない方法で、学校の授業を受けている子もおり、このような社会の中で私たちに課せられた使命は大きいなあと感じています。綿先生のお話を聞いていると、障害があるからという観点ではなく、誰だって得意・不得意はあるし、できること・できないことがある。間違ったらやり直したり、謝ればいいし、やってみてできなかったら、また違う方法や手段を考えればいいという、言葉にすれば簡単だけど、なかなか実行で

きないことを実行する力を持っている方なんだなあと感じました。これからこの仕事を続けていく中で、何を大切にしていってらよいか、今ではなく将来を見据える力をもっとつけていかなければならないと感じました。

■綿先生は、4人兄弟の末っ子としてお生まれになりましたが、両親、兄、姉（2人）が障害者（家族6人のうち5人）とのことでした。そのような環境の中、ただ一人の健常者として家族を支えながら、20歳で初めて施設を立ち上げ、これまで33年間で50施設を立ち上げ、しかもすべて利益を上げているというのですから驚きです。利用者は約500名（生後3ヶ月のダウン症の子どもから最高齢は89歳の介護者）の方々がいる中で、ライフステージが繋がっていくサービス（個人に合った福祉・教育・作業や生活を支援する場の確保）により、家族が安心してできる施設を確立・提供が実現できていることの事です。そして、一生涯、当たり前の人として暮らしていけるという、まさしく社会福祉法人北心会が目指すスタイルと重なっているものでした。綿先生のお話は、とても前向きで、様々なことにアグレッシブにチャレンジしているように思われるのですが、実は、家族に障害者がいる中で、後ろを振り向くとろくなことがない、だから前を向いて一つ一つの壁を乗り越えていくしかないのだということでした。このことが原動力となり、法律や様々な規制のある中、事業者、利用者及び家族がウインウインな関係性を保っていけるような新たな発想が生まれ、行動力に繋がっていくのだと感動しましたし、自分自身も仕事をしていく上でとても勉強になりました。



綿先生



質疑応答



理事長の挨拶

その他、一般の来場者の方からは「大変感動した」「また、講演を聞いてみたい」「親として考えさせられました」「元気をもらいました」などなど、素敵な感想をいただきました。この感動を、今だけのものではなく、これからの北心会や地域の発展のための原動力として生かしていきたいものです。

今回の発達講座は主催者としてかなり手ごたえがありました。これからも第3回、4回と回を重ねていき、学びを深めていきたいです。

ご来場されたみなさま、そして、お忙しい中、講演してくださった綿先生、本当にありがとうございました。